

Hermann Gelhaus の時称論

石井賢治

1964年に、H. Weinrich は“*Tempus. Besprochne und erzählte Welt*”¹⁾ を著わし、それ以前の記述方式とは異なった構造的な記述方式を導入して、時称に新たな解釈を加えた。同時にそこで、彼は時称問題の根本に触れる幅広い発言を行なっている。その Weinrich の時称論の反響は、近年幾つかの論文の中に、さまざまな形で現われている。Gelhaus の1966年の寄稿論文“*Zum Tempussystem der deutschen Hochsprache*” (Wirkendes Wort)²⁾ はその1つと言えよう。この論文は、Weinrich の時称論に対し批判的な立場から書かれたもので、時称に関する新たな論議を呼び起こしている。さらに Gelhaus は“*Sind Tempora Ansichtssache?*” と題した論文で、Weinrich 時称論に対する批判的立場を明らかにすると同時に、“*Tempussystem*”³⁾ で唱えた時称論を明確にし、さらに発展させようと試みている。この論文は“*Tempussystem*” とそれに直接関連する若干の論文と共に“*Der Begriff Tempus—eine Ansichtssache?*” (Beihefte zum Wirk. Wort 20, Düsseldorf 1969) に収録されている。本稿ではこの Gelhaus の時称の意味論を概観していきたい。だがその前に Weinrich の時称の研究方式とそれに対する Gelhaus の批判について簡単に触れておこう。

1. H. Weinrich の時称研究の方式

Weinrich の時称研究の方式は一般に“構造主義”(Strukturalismus)と呼ばれているもので、その思考過程は次のように概括される。

a) 動詞形の選別：すべての動詞形から研究対象となるべきものを構造限界を耳で捉える方式によって選別する。その結果、従来時称とみなされているものとほぼ等しい動詞形が選出される。

b) 時称グループの形成：a)で選別された動詞形は時称として、“時称の一致”によって二つのグループに分けられる。一つのグループ(=グループI)には Pras., Perf., Fut. Iが、もう一つのグループ(=グループII)には Prät., Plqu. そして<würde + 不定詞>が属する。

c) 時称グループと“話の場面”(Sprechsituation)との一定の結びつき：Weinrich は統計から次のような結果を得る。すべての時称がどのテキスト(=話の場面)においても一律に用いられるということではなく、時称グループと“話の場面”との間に一定の結びつきがあ

1. Harald Weinrich, *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*, Stuttgart 1964. についての詳細は拙稿「ドイツ語の時称体系」(愛媛大学教養部紀要, 創刊号1969年3月)を参照して下さい。

2. H. Gelhaus, *Zum Tempussystem der deutschen Hochsprache*. Ein Diskussionsbeitrag, *Wirkendes Wort* 16, 1966. S. 217~320.

3. H. Gelhaus, “*Zum Tempussystem der deutschen Hochsprache*” の略。

る。グループⅠの時称が支配的な“話の場面”には手紙、対話、戯曲、叙情詩、文芸批評、論文、卜書き等が属する。グループⅡの時称が支配的なものには小説（短編・長編）、そして口頭・筆記を問わずどんな種類の物語も属する。

d) 時称の働き：グループⅡの時称の支配的な“話の場面”全体に共通するものからみて、このグループの時称を物語（Erzählen）の時称、同様にしてグループⅠの時称を論述（Besprechen）の時称とする。すなわちグループⅡの時称は伝達内容が物語であること、同時に話し手（書き手）が肉体的にも精神的にもくつろいだ状態にあることを表わす。その場合聞き手（読み手）にとって、それは緊張を緩めてよろしい、同時に直ちに反応を示さなくてもよい、という印になる。グループⅠの時称は、伝達内容が論述であること、すなわち話し手（聞き手）が肉体的・精神的に緊張した状態にあることを表わす。この場合それは聞き手（読み手）に対して、この発話は彼に直接関わることだから、直ちに言語上（言葉で）の、あるいは非言語上（行為そのもの）の反応を要求する印になる。

d) さらに Weinrich は時称グループ内で時称を“話の見通し”（Sprechperspektive）の点から区分する。Präs., Prät. は各々の時称グループ内で“話の見通し”を表わさないとすることで“基礎時称”（Null-Tempus）とする。“先見的見通し”（Vorausschauende Perspektive）をもっている時称をグループⅠでは Fut. I, グループⅡでは <würde + 不定詞>、“回顧的見通し”（Rückschauende Perspektive）をもっている時称をグループⅠでは Perf., グループⅡでは Plqu. とする。

e) “時称の一致”が破られる場合は“時称隠喩”（Tempusmetapher）となる。

2. H. Weinrich の時称論に対する H. Gelhaus の批判

Gelhaus は前掲の“*Sind Tempora Ansichtssache?*”で以下のような点を具体的に取り上げて批判している。彼は Weinrich が a) の段階で内容（＝意味）上の判定基準に依らず、形式上の基準に依る行き方をとったことは是認している。しかし、Weinrich 時称論の基礎ともいえる“時称の一致”の存在には非常に深い疑念をもっている。それは、比較的新しい文法書のうち“時称の一致”を認めているものが、Duden 文法しか見い出せなかったということと、さらに G. Beugel と U. Suida の Perf. と Prät. の研究から、Duden 文法で認めているよりはるかにこの規則は緩やかなものである、と確認したことによる。統計の解釈では、その解釈が信服に足るものでなく、任意的であると Gelhaus は評している。すなわち Weinrich は“物語り手”に一定の心的態度または姿勢を仮定し、その他のすべてのジャンルには“論述”（Besprechen）の心的な基本姿勢を設定することによって、文学的概念である“物語”（Erzählung）を心理学的に解釈している、と述べている。また、Gelhaus は“*Sind Tempora Ansichtssache?*”に掲げた統計に基づいて、Weinrich の解釈が統計の域を越えている、と指摘している。統計資料は、（統計1）Weinrich によって“論述の世界”に属するとされたジャンルと、“物語の世界”に属するとされたジャンルからとり出された24のテキスト（1945年以降のもの）、そして（統計2）1972年に日刊紙に投書された読者の手紙40通から成っている。統計1では、“物語”（Erzählung）のジャンルのテキスト10のうち3つが、時称グループⅠの明らかな優位（数的に）を示している。

1) Grzimek, *Serengeti darf nicht sterben*

TGI (7715) : TGII (2097) = 78.6 : 21.4%

2) Stauffen, *Solange Dein Herz schlägt*

TGI (4359) : TGII (399) = 91.6 : 8.4%

3) Strittmatter, *Ole Bienkopp*

TGI (10262) : TGII (4517) = 69.4 : 30.6%

2つは時称グループ I と II の間にほぼ均衡を保っている。

1) Frisch, *Homo Faber*

TGI (3191) : TGII (4324) = 42.5 : 57.5%

2) Th. Mann, *Die Betrogene*

TGI (1134) : TGII (1254) = 47.5 : 52.5%

この観察から、「物語では時称グループ II が優勢である」という Weinrich の主張は信憑性をかなり失う、と Gelhaus は考える。

統計 2 からは、Weinrich の主張「時称グループ I もまた、助言、独話、記述、手紙、注解、説教、討論、卜書き、報告において優位を占める」は、「手紙」(Brief) というジャンルに関しては否定される、と Gelhaus は述べている。そして、「個々の手紙では、時称グループ II がむしろ非常に優勢であり、全体的にはやや優勢である」と Gelhaus はいっているが、統計 2 の 40 通の手紙のうち、時称グループ II が数において勝っているのは 14 通である。40 通の手紙全体の時称の分布は、TGI (765) : TGII (844) = 47.5 : 52.5% である。だが、全部のテキストにおけるグループ I と II の総時称数を比べてみても、各テキストの総時称数に相違があるので、ここでは無意味であろう。

“話の見通し”の観点からの時称グループ内での時称の区分であるが、これもやはり任意的かつ心理学的なものである、と Gelhaus は評している。さらに“回顧的見通し”と“先見の見通し”は明らかに“先時性”と“後時性”、つまり“時間”である、と断言する。そして、次の例を引いて、Weinrich の解釈が実際の用法に反していることを指摘している。例：……“mit der Wittenberger stand ja seit 1560 die Frankfurter Bibelausgabe in gefährlichem Wettbewerb, den Wittenberg ein Jahrhundert später verloren hatte”。

H. Gelhaus の指摘するように、確かに“時称の一致”を認めているものは数少ない。私の知る限りでは Duden 文法と Walter Porzig (*Das Wunder der Sprache*, Bern 1950, S. 185) である。それはともかく、“時称の一致”は H. Weinrich 時称論の基礎ともいえるべきものなので、例えば、“時称の一致”の逸脱が“隠喩”(Metapher) となるほどの結び付きが、各時称グループ内の時称間に存在するかどうか、広範な資料を基にしてさらに調べる必要があろう。

3. H. Gelhaus の時称論

3-1 時称研究の方式

伝統文法の 6 時称は、周知のように、形のみからは正当化されえない。ただ内容のみからのみこれら 6 時称は一括されている、と Gelhaus は考える。だが、旧来の文法で時称の解

積に用いられてきた概念範疇(過去・現在・未来に3分された時間)が不適當であることは、すでに認められているところである。Gelhaus はそれを1つもしくはそれ以上の別の範疇で置き換えなければならない、と考えた。そこで、Gelhaus は、形による意味分析に生成文法理論を取り入れた方式で、時称研究を行なった。すなわち、彼はまずそれらの6時称が“完結的な体系”(ein geschlossenes System)を成している、という前提から出発する。なお次のようなテストを行なう基礎として、すべての時称は同じ意味をもっている、という仮説をたてる。そして、与えられたテキストの中で、順次あらゆる時称を置いて、テキストの意味が変わるかどうかが、場合によっては、どのように変わるかを観察することによって、この仮説を真または偽と検証する。時称の意味は推論することになる。すなわち、“言語”(langue)に属する働き(Leistung)が知られていない要素(この場合“時称”であるが、 x とする)を、働きが知られている要素(時の状況語等だが、 y とする)に関連させ、 x が y にどのような作用を及ぼすか、そして逆の場合も観察する。それから、分っていない要素については、この作用から帰納的に推論する。つまり、その場合時称の置換テストが行なわれ、 x と y との意味論上の両立性・非両立性が問題になる。このような方法でGelhaus は時称の意味論を、意味論上の成分の組み合わせの体系として論じている。

3-2 時称の定義

Gelhaus は先の寄稿論文“*Tempussystem*”の説明(Erläuterung)および続き(Weiterführung)の意味で“*Sind Tempora Ansichtssache?*”(Beihefte zum Wirk. Wort 20, Düsseldorf 1969, S. 69~88. —以下“*Ansichtssache*”とする)と題する論文を書いた。この論文で、Gelhaus は“*Tempussystem*”での時称の意味論をさらに明確・詳細にして次のような時称のモデルを作り上げている。

図式1 時称のモデル

Ebene	Tempus	(1) 終了 (Abschluß)	(2) 開始 (Beginn)	(3) 予言 (Vorhersage)
Tun=(Sein oder Geschehen)	Präs.	-	±	-
	Prät.	+	+	-
	Fut. I	-	±	+
‘Verfügen’ über ein abgeschlossenes Tun bzw. Vorhandensein eines abgeschlossenen Tuns	Perf.	-	±	-
	Plqu.	+	+	-
	Fut. II	-	±	+

このモデルから読みとれる時称の定義は次のとおりである。

- 1) Präs. は、行為(=存在または出来事)が話の時点で終了していないことを表わす。
- 2) Prät. は、行為(=存在または出来事)が話の時点で終了していることを表わす。
- 3) Fut. I は、行為(=存在または出来事)が話の時点で終了していないことと、話し手

が“予言”(Vorhersage)していることを表わす。

4) Perf. は、終了した行為の‘Verfügen’が、または一非人称の表現の場合は一終了した行為の存在が、話の時点で終了していないことを表わす。

5) Plqu. は、終了した行為の‘Verfügen’が、または一非人称の表現の場合一終了した行為の存在が、話の時点で終了していることを表わす。

6) Fut. II は、終了した行為の‘Verfügen’が、または一非人称の表現の場合一終了した行為の存在が、話の時点で終了していないことと、話し手が‘予言’していることを表わす。

この定義から明らかなように、先にたてた仮説は、検証により否認されることはもちろん、6時称が“統一的配列原理”(Einheitliche Ordnungsprinzipien)に基づいた体系を成している、という仮定も否定される。

次に、上掲の定義と“Tempussystem”の定義とを比較してみると、次の点に相違が見られる。

1) Perf. に関しては、どちらの定義も、伝統文法が<未来完了の代用>と称している用法も考慮しているが、Fut. I, Fut. II に関しては“Tempussystem”で考慮されなかったいわゆる<推量(Vermutung)を表わす用法>が、“Ansichtssache”の定義には取り入れられている。

2) “Tempussystem”の定義には、“開始”(Beginn)、“終了”(Abschluß)という点(Hin-sicht) [od. 成分(Komponente)]が存在するが、“Ansichtssache”では、“開始”がなくなり、“予言”(Vorhersage)という点が入ってきている。

3) “Tempussystem”では“動詞の基礎的叙述”(die Grundaussage des Verbums)を捉えるために、固定概念として“Tun”という表現を用いている。これは“Ansichtssache”の定義では“Tun(=Sein oder Geschehen)”に、“Verfügen”の領域も“Verfügen über ein abgeschlossenes Tun”に“Vorhandensein eines abgeschlossenen Tuns”の場合が加えられ、より厳密になっている。

3-3. “temporal”について

Gelhaus は、時称の意味が規定される3つの点(“終了” “開始” “予言”)のうち、“終了” “開始”を“本来”のtemporalな点と見なしている。それに対し、“予言”(Vorhersage)と“Verfügen”または“存在”(Vorhandensein)に関する部分的情報(Teil-Information)は別種のものともみている。従って、内容的にみて、時称(Tempus)を話の時点での行為の“終了”または“開始”に関する情報の意味にGelhausは解している。だが、“開始”という点からは“終了”という点以上に時称を区分することができないので、実際にtemporalな点として残るものは“終了”だけであるとしている。前掲の定義(3-2)で“開始”という点を考慮していないのはそのためである。

3-4 時称の限界

“Verfügen”(または“Vorhandensein”)と“Vorhersage”を“nicht-temporal”なものと

4. Vgl. Baumgärtner/Wunderlich, *Ansatz zu einer Semantik des deutschen Tempussystems*, in: *Der Begriff Tempus — eine Ansichtssache*. Beihefte zum Wirk. Wort 20, Düsseldorf 1969, S. 27.

し、また研究の結果、従来時称形とされているものの内容にも統一的原理が存在しないことが明らかになった以上、時称の限界が問題になってくる。特に Fut. I が時称と認められるかどうかの問題となるが、Gelhaus は、元来相互関係にある要素が互いに連合されているのだから、従来の6時称をそのまま時称として認めればよい、という考えに立っている。

3-5 Gelhaus の用語の概念

“Verfügen” という語は、Baumgärtner/Wunderlich が指摘しているように⁴⁾、2つの意味：“besitzen”（所有する）と“anordnen”（規定する）を持っているが、Gelhaus は“besitzen”に近い意味で“Verfügen”を用いている。また〈dem Sein oder Wesen von etwas zugehören〉、〈jemandem zu eigen sein〉、〈zu jemandes Befindlichkeit gehören〉のようなパラフレーズで置き換えを試みている。このような意味で用いられる“Verfügen”は、真正の主語（das echte Subjekt）の場合、単に人の主語（das personale Subjekt）だけでなく、事物の主語（das Sachsubjekt）にも関連させられるものであり、“Vorhandensein”は、非人称表現の仮主語（das unechte Subjekt）の場合（es hat geschneit, es hat geregnet）“Verfügen”に代って用いられる。具体的な例で示せば、〈Kolumbus hat Amerika entdeckt.〉は、一定の終了した行為（= Amerika entdecken）が Kolumbus の〈存在または本性に属している〉、〈彼の所有である〉、〈彼の存在性に属している〉を意味しているということになる。あるいは〈Dieser Baum hat viele Früchte getragen.〉といえ、これは一定の終了した行為（= viele Früchte tragen）が〈この木の存在または本性に属している〉、〈この木の所有である〉、〈この木の存在性に属している〉ということの意味する、となる。この“Verfügen”（または“Vorhandensein”）という概念を用いて、Gelhaus は完了形（das Perfekt-Gefüge）の意味を明らかにしようとしている。それを具体的な例で示そう。まず Perf. の例を見よう。

例. Mein Freund ist gestern abend verunglückt, als er mit dem Auto nach Hause fuhr.

この文は〈友人が、その経過が時間的に gestern abend に固定されている一定の終了した行為（= verunglücklichen）を verfügen している〉ということを表わしている。この場合、verfügen の現在形が使用される。次に Plqu. の場合を見よう。

例. 1) Kaum hatte er sich niedergelegt, so hörte er klopfen.

2) Er kämpfte so lange, bis er seinen Gegner bezwungen hatte.

Plqu. の場合は、〈話の時点での終了〉を表わすために、書き換えでは verfügen の過去形が使用される。

1)の文は〈彼が一定の終了した行為（= sich niederliegen）を verfügen するや否や、彼はノックの音を聞いた〉と書き換えられる。2)の文の Plqu. は従来の解釈（先時性を表わす相対的時称）では説明できないものであるが、Gelhaus はそれを次のように説明する。〈彼が一定の終了した行為（= bezwingen）を verfügen するまで戦った〉ということ、この文は表わしている。

次に“Vorhersage”（予言）であるが、これを“Gegenwärtiges”（現在のこと）にも“Zukünftiges”（未来のこと）にも関係することができる包括的な意味で使用している。“Voraussage”（予告）という概念（それ自体“Vorhersage”と同義である）は〈“Zukünftiges”に關係する“Vorhersage”〉の意味で使用している。

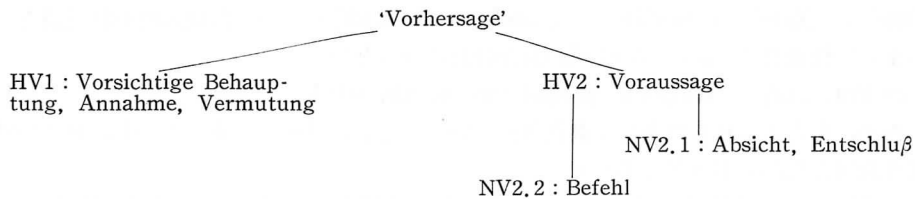
3-6 Fut. I の機能

Gelhaus は “*Ansichtssache*” で Fut. I の機能を改めて記述している。その Fut. I の機能を概観するために、彼が掲げた二つの図式をここに提示する。

図式 2 Komponenten

	(1) Abschluß	(2) Beginn	(3) 'Vorhers.'.	(4) Vors. Beh.	(5) Vorauss.	(6) Absicht	(7) Befehl
Präs.	-	±	-	-	-	-	-
Futur I	HV1	-	+	+	-	-	-
	HV2	-	-	+	-	+	-
	NV2.1	-	-	+	-	+	-
	NV2.2	-	-	+	-	+	+
Prät.	+	+	-	-	-	-	-

図式 3 Variantensystem



図式 2 と 3 から、この分類法について次のことが分る。Fut. I の用例全部が、その働きにおいて “Vorhersage” (予言) という特徴をもつことはもちろん、それらはさらに HV1 または HV2 に択一的に割り当てられる。HV2 に属すると確認された用例中には、さらに NV2.1 か NV2.2 のいずれかに属するものが存在する。

次に、個々の Variante を区分する判定基準に、目を向けてみることにする。まず第一に、HV1 と HV2 の違いは、HV1 の場合行為 (存在 または 出来事) が話の時点で始まっているが、HV2 では行為が話の時点でまだ始まっていない、という点にある。コンテキストから行為が話の時点ですでに始まっていることが明らかでない場合は、<(auch) jetzt>, <in diesem Augenblick>, 場合によっては拡大した <das gilt (auch) (schon) für diesen Augenblick> を付加してみることによって、行為が話の時点ですでに始まっていることを証明することができる。このテストが否定的な結果に終る場合、そこにあるのは必ず HV2 だということになる。もちろん、コンテキストから (bald, morgen 等 適当な時の副詞により) 当該の行為が話の時点でまだ始まっていないことが明らかである場合、このテストは行なう必要がない。NV2.1 (“意図, 決心”) は 1 人称に結びつけられている。もし、それがコンテキスト中に 予め 存在しない場合は、<so habe ich beschlossen>, <das ist meine Absicht> のような追加によって拡張することができる。NV2.2 (“命令”) は 2 人称に結びつけられていて、命令の表現に変形する (transformieren) ことができる。

3-7 Präs. と Fut. I の関係

Präs. と Fut. I は、Fut. I に“Vorhersage”という成分 (Komponente) が含まれているので、簡単に交換することはできない。特定の状況の下でのみ可能である。Gelhaus は、この両者の複雑な関係を次のように整理している。

1) Variante 1 (“控え目な主張、仮定、推量”) の Fut. は、〈wohl〉, 〈sicher(lich)〉, 〈gewiß〉, 〈vielleicht〉等のような一定の副詞が、控え目な主張、仮定または推量としての叙述の性格を保証する場合、Präs. によってのみ換えることができる。

2) Variante 2 (“予告”) と 2.1 (意図、決心) では Fut. は次の条件の下でのみ Präs. によって換えることができる：

a) Präs. の、‘未来への関連’ (Zukunftsbezug) がはっきり保証されていなければならない。それは、次のような手段によって行なわれる：

aa) 時の状況語 (例えば bald, morgen) によって、

ab) 時間的に制限する wenn-Satz によって、

ac) Fut. が連続してまたは繰り返し用いられる場合、最初に置くことによって、

ad) テキストの意味の論理によって。

b) この Fut. の本動詞は 〈dauern〉 と 〈bleiben〉 であるが、それらの動詞は 〈acht Tage〉, 〈(auch) weiterhin〉, 〈(auch) in Zukunft〉 といった類の時の状況語と一実際にまたは任意的に一結びついて現われなければならない。

c) Fut. は時の (temporal) 接続詞 (wenn, bis, sobald, bevor) と結びついて現われる。だが、たとえこれらの条件が満たされていようとも、Fut. の方がよいし、あるいは次のような場合しかも不可欠である：

a) Fut. の本動詞が〈sein〉または〈haben〉の場合、(例外：‘計画’を記述しているテキスト)。

b) 話し手が叙述 (Aussage) を強調しようとする場合。Variante 2.2 (“命令”) ではこの理由から大てい Fut. が必須である。

c) ca) 一定の時称の構造 (Tempus-Konstruktionen) (例えば Präs. -Fut. I) が問題である場合、cb) きまり文句 (Formeln) と引用 (Zitate) が問題である場合。

3) 文体上の考量が Fut. の使用を制限する場合がある。できるだけ回避されるのは：

a) 反復 (Häufung) 以外には特別な文体上の作用が得られない、ということでなければ対結文 (Satzreihe) と付結文 (Satzgefüge) における Fut. の反復。

b) 回りくどい不定詞の構文 (例 Modalverb-Futur-Konstruktion)

c) 受動の未来 (特に gelobt werden werden という位置にある3人称複数)。

以上、H. Gelhaus の時称論を概観してきたが、その大きな特色は次の点にある。時称の記述にあたって、心理[学]的要素のはいらない客観的特徴を挙げるために、コンテクストからくる情報を混入させないようにコンテクストを考慮していないことと、また従来の時称研究で必ずといってよいほど考慮に入れられている第三の関与者である話し手 (書き手) が、ここでは考慮されていない点にある。なお、Gelhaus のこの研究において必要なことは、競合関係に基づく選択の余地を話し手 (書き手) に残す Perf. と Fut II の間の関係が詳述されることであろう。